

# エルンスト・ユンガーの初期作品と「危機」の言説

稲葉 瑛 志

**要旨：**本論は、20世紀ドイツの作家・思想家エルンスト・ユンガーの初期思想を、ヴァイマル共和国の「危機」に対する応答として明らかにする試みである。歴史学者デートレフ・ポイカートは「古典的近代」の病理論のなかで、過度な近代化のもたらした光と闇を鮮やかに描き出した。しかしその議論においては、経済危機という実体があまりにも重視されることによって、この時代の経験的次元における「危機」の複雑性が単純化されてしまったのである。本論は、「危機」概念の3つの意味内容を検討し、そこに従来見落とされてきた「危機」の「ユートピアの精神」を分析の中心に据え、ユンガーの初期作品を読み直すことを試みた。とりわけユンガーの歴史観、思考法、構想について考察し、黙示録的歴史観、「好機としての失敗」の思考法、「技術の完成」の秩序構想を抽出した。

## はじめに —— 「古典的近代」の病理論

ヴァイマル共和国時代（1918-1933）では、社会・政治・文化・技術などの領域において様々な変革が試された。それゆえ共和国の時代は、ナチス・ドイツの「前史」として回収されることのない固有性をもっていと特徴づけられる。しかし同時に、近代という長い時代区分における「危機（Krise）」がこれまでにないほど深刻なかたちで露呈した時代でもあった。このような時代状況のもとで執筆されたエルンスト・ユンガー（Ernst Jünger, 1895-1998）のテキストにも、近代の光と闇は鮮明にうつしだされている。この時代における近代の「危機」の言説を切り口に、ユンガーというひとりの作家・思想家の作品からその思想的意味を抽出する前に、ヴァイマル共和国史を鮮やかに描き出した歴史学者デートレフ・ポイカートの「古典的近代（klassische Moderne）」の病理論を概説しながら、ユンガーの思想が形成された歴史的・社会的状況を説明することから始めよう。

これまで蓄積されてきたヴァイマル共和国研究史のなかで、パラダイムの転換を決定づけたのは、ポイカートの『ヴァイマル共和国——古典的近代の危機（Die Weimarer Republik. Krisenjahre der klassischen Moderne）』（1987）<sup>1</sup>であった。ポイカートは1918年から1933年までのヴァイマル共和国時代を分析対象にしているが、「工業社会的な近代性の危機的性格」を争点として歴史叙述を行う立場から、1890年代から1930年代までの期間を「古典的近代」の時代として設定した。<sup>2</sup> むろんそれまでも隣国フランスの影響を受けながらドイツの近代化は進行していたが、ドイツ社会が急速な近代化を経験したのは1890年以降のことであった。そしてドイツの近代化は、ヴァイマル共和国誕生からそれがナチス・ドイツによって倒壊されるまでの14年間で、工業・産業などの社会領域のみならず、生活・文化などの文化領域にまで拡大され、近現代の生活形態をまさに「古典的なかたちで仕上げた」<sup>3</sup>のであった。

「古典的近代」の歴史的叙述にあたってポイカートは、急速な近代化によってもたらされた社会の徹底した合理化傾向だけに焦点を当てるのではなく、それに随伴した構造的問題や反動などの「危機」の諸相も同時に照らし出している。数例を挙げると、経済的領域では、生産性

の全般的な合理化が官僚主義的な市場統制へと変貌してしまったこと、社会的領域では、共和国が社会衛生学や優生学の理論を社会政策として実践したがために、優生学的な「選別」の原理が社会的基盤に当然の如く受容されてしまったことが指摘されている。また、日常生活の領域では、生活形態の機能主義的傾向と性の合理化が促進されることによって、社会の急激な変化に対して保守的な教養市民層の不満や反動が引き起こされたこと、文化的領域では、「黄金の20年代」に突如花開いた大衆文化が、この芸術的潮流に取り残された伝統的な芸術集団による過激な文化批判の台頭を誘発することにつながったことなどが指摘されている。

したがって、ヴァイマル共和国は一方では、社会のあらゆる領域において、「近代的存在のほとんどすべての可能性が試し尽くされた時代」<sup>4</sup>として特徴づけられる。しかしながら他方では、急速な近代化は極端な社会の合理化を助長することにつながり、政策や方針の歪みが是正されることはなく、「危機」の要因として先鋭化された時代でもあった。<sup>5</sup>

このようにしてポイカートの近代の光と闇を描き出すとき、「近代」という概念そのものは、古代、近世、近代、現代という歴史学の一般的な時代区分として使用されていない。それはむしろ、「システム化と規律の支配という構造的シンドロームによって特徴づけられる近代＝<モデルネ (Moderne)>」<sup>6</sup>であり、今日的な表現では「現代」のことに近い。

「近代」概念をこのように理解したポイカートは、「ヴァイマル共和国の没落とナチスの権力掌握を説明するのに、長期的な、ドイツ特有の発展をとりたてて強調することは、必要ではない」<sup>7</sup>と主張し、西ドイツの「社会構造史派」が唱えた「ドイツ特有の道 (Sonderweg)」論の有効性に否定的見解を示したのであった。というのも、ドイツの歩んだ道を「特殊」とみなすことは、西欧諸国の「近代化」を「正常な道」として規範化する見方を許してしまうことになりかねないからである。<sup>8</sup> こうした懸念を表明した上で彼は、いわゆる「ドイツの破局」を、合理主義的近代化の徹底と危機的要因との結びつきによるひとつの帰結として提示したのであった。<sup>9</sup>

## 1. 「危機」の意味論——実体としての「危機」と言説としての「危機」

この画期的な研究以降、「とりわけドイツにおけるヴァイマル共和国研究、ひいてはドイツ現代史研究は「古典的近代の危機 (Krise der klassischen Moderne)」の概念抜きには考えられないと言っても過言ではない」<sup>10</sup>と評価されてきた。「古典的近代」の病理論はたしかに、その現代的な意義も含めると、これまでにないインパクトをヴァイマル研究史に与えたといえる。しかしながら、歴史学者P・フリッチェが批判するように、ポイカートはこの病理を説明するにあたって、1929年の世界恐慌によって解き放たれた経済危機を主要因としてあまりに重視しすぎている。<sup>11</sup> そのため、この14年間を生きた人間が経験的次元で感じ取り、語った「危機」の言説の複雑性がかえって見えにくくなってしまっているのである。この問題は、ポイカートが、「危機」概念の本来有していた意味内容を深く検討することなく、「危機」を歴史の実体として片付けてしまったことに起因する。したがって今後、彼の研究成果を踏まえた上で、この時代状況の複雑性を理解しようと試みるなら、焦点を当てるべきは「古典的近代」の歴史の意味よりもむしろ、「危機」の言説の方である。その考察の前作業として、以下では、「危機」概念のなかに含まれる3つの意味内容を検討してみよう。

「危機 (Krise)」は語源的には「区別する」「判決する」「決断する」などを意味するギリシア

語の動詞 *kriw* に由来する。歴史学者ラインハルト・コゼレックの、事典『歴史基礎概念 (Geschichtliche Grundbegriffe)』における記述によると、「危機」は古代ギリシアにおいて、法学、神学、医学などの学問領域で使用されていた言葉であった。そしてこの語が概念として使用されるときには、正と不正、救済と災厄、生と死などの厳しい二者択一の決断が当事者に迫られたという。コゼレックの概念記述において重要なことは、「危機」が、概念として定着するその歴史的過程において様々な意味内容を獲得したことである。17世紀以来、この語は政治、心理、経済そして歴史の領域において隠喩として使用されるようになった。18世紀末になると、「最後の審判」という語が革命の出来事に対する世俗的な意味として用いられたように、「危機」という語もまた神学的・宗教的色彩をふたたび纏うようになる。とりわけフランス革命前後の1780年代以降、「危機」は、時代の変革あるいは新しい時代の幕開けを語る際に使用されるようになったのである。<sup>12</sup>

さらにコゼレックは、西洋史における「危機」概念の使用法を、意味内容の異なる3つの解釈モデルに分類した。1つ目は、歴史を「継続的な危機 (Dauerkrise)」とみなす解釈モデルである。例えば、シラーの詩句に「世界史とは世界審判である (Die Weltgeschichte ist das Weltgericht)」という有名な言葉がある。シラーの意味するところとは別に、19世紀のドイツにおいてこの言葉は、解放戦争を契機とするドイツナショナリズムの高揚を背景に、歴史における危機的状況に神の意志が示されるものとして理解されるようになった。つまり、歴史を審判までの一つのプロセスと捉え、その都度の危機的状況には政治的・宗教的決断が不随するという解釈モデルがこれにあたる。2つ目の解釈モデルは、「危機」を「またとない加速的プロセス (eine einmalige, sich beschleunige Vorgang)」と理解するものである。歴史の出来事は常に一度きりではあるが、変化の波そのものは歴史の中で類似した形を取り、何度も起こり得る。その限りにおいて、ある危機的状況は、様々な対立を一気に解消し、新たな局面を切り開くために必要な歴史的出来事とみなされる。それゆえ、この解釈モデルにおいて「危機」は「反復期間の概念」として特徴づけられる。3つ目の解釈モデルは、「危機」をこれまでの歴史における「最後の危機 (letzte Krise)」として理解するものである。「最後の審判 (Jüngste Gericht)」という語が危機的状況において隠喩的に使用されるのは、この解釈に依拠する場合である。第3のモデルは、一度きりの決断を伴う純粋な「未来概念 (Zukunftsbegriff)」として理解されている点において、前者2つの解釈モデルとは性格が決定的に異なる。<sup>13</sup>

このように、「危機」概念は多様な意味内容を持ち、通常言及されることの否定的な意味だけではなく、第3の解釈モデルで示されたようにユートピア的契機も内包されていることがわかる。それゆえ、実体としての「危機」にのみ関心を寄せ、とりわけ第3の解釈を視野の外に置いたポイカートの「危機」の理解は一面的にうつらざるを得ない。以下では、「古典的近代」の「危機」を、1929年の経済危機というひとつの現象に還元することなく、近年の研究成果も取り入れながら、言説として捉え直すことを試みる。<sup>14</sup>

「危機」は「古典的近代」の時代において、実体として存在していただけでなく、言説としても語られていた。第一次世界大戦で敗北したドイツでは、オスヴァルト・シュペングラーの『西洋の没落 (Der Untergang des Abendlandes)』(1918/1922)のような、歴史の「危機」を煽る書物がベストセラーになり、社会学ではアルフレート・ヴェーバーの『ヨーロッパにおける近代国家概念の危機 (Die Krise des modernen Staatsgedenkens in Europa)』(1925)や、文学ではエルンスト・ローベルト・クルツィウスの『危機に立つドイツ精神 (Deutscher Geist in Gefahr)』

(1932)、哲学ではエドムント・フッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学 (Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie)』(1936)などの「危機」を書名に冠した書物が様々な学問領域において氾濫していた。実際に、1918年から1933年のあいだに、政治・経済・社会にかんするおよそ370本を超える大量の文書が「危機」をタイトルにつけていたことから、「危機」はこの時代をもっとも特徴づけた言説の一つであったことが伺える。<sup>15</sup>

こうした共和国の「危機」を言説として取り上げて論じる際に念頭に置かなければならないのは、歴史学者R・グラーフの「ヴァイマルの危機は、それを診断する人々の産物として理解すべきである」<sup>16</sup>という忠告である。すなわち共和国の「危機」は、危機の現象とそれを診断する観察者という依存関係の観点から分析されなければならない。その分析においては、各観察者の「危機」の言説の根底にどのような「期待の地平」<sup>17</sup>があるのか、どのような意味内容を含むイメージがあるのかに注意する必要がある。<sup>18</sup>2005年以降に「古典的近代」の「危機」の研究動向が変化したことを印象づけた、M・フェルマーとR・グラーフによって編集された論集は、この視点立ち、「危機」の言説を多角的に検討し、以下の見解を導き出した。

ヴァイマル共和国の政治的・社会的・倫理的危機が現象として確認できる時、それを伝える観察者の「危機」の言説は、「偶然性 (Kontingenz)」「造形可能性 (Gestaltbarkeit)」「決断 (Entscheidung)」などの意味と結びつく傾向がある。観察者の「危機」の言説はその時、過去や伝統の喪失を嘆くものとしてのみならず、社会的・政治的制度が変革可能であるという確信としてもあらわれる。<sup>19</sup>グラーフはこの未来志向を備えた「危機」の意味を、「ナショナルスティックなもの」「社会主義的なもの」「ヨーロッパ・インターナショナルなもの」「精神的・道徳的なもの」の4つのモデルに分類している。<sup>20</sup>いずれのモデルも内容的には異質なものであるが、「ユートピアの精神 (Geist der Utopie)」から生じた点において共通性が見られる。このように「危機」の言説は、共和国の急進左派の知識人だけでなく、「保守革命 (konservative Revolution)」の思想家を中心とする急進右派の語りも特徴づけていたのである。<sup>21</sup>また、グラーフの指摘と並行して歴史学者B・ツィーマンも、この言説がとりわけ、共和国に敵対する急進右派の語りを特徴づけていたことを指摘している。急進右派は弱体化した共和国を「危機」と診断し、人々に対して、没落かあるいは新たな権威主義的国家へと変貌するか、という二者択一の決断を迫る言説を広めていた。<sup>22</sup>彼らは、既存のあらゆる価値観が崩壊した社会の根底に「基盤なき偶然性」<sup>23</sup>を察知していたのであり、社会が「別様にも可能であること、つまり決定的な生の基盤をもたないなら、社会が別のかたちでもありうる」<sup>24</sup>と解釈していた。したがって、彼らの「危機」の言説は、古い時代を終わらせ、新しい時代を始めるために、終末論的意味におけるひとつの「決断」を迫るものであった。<sup>25</sup>

共和国の「危機」の言説をこのように整理した上で、いまいちどコゼレックの考察に立ちかえると、彼の以下の発言は、——もちろん分析対象になっている時代状況はグラーフの議論とは異なるが——「危機」の言説における「決断」という局面を正確に捉えたものかといえよう。

危機的状况における全般的な不安定さはそれゆえ、ひとつの確信によって貫かれている。それは、——いつとは決まっていなくても、きつと必ず、どのようにしてとは決まっていなくても、なんらかのかたちで確実に——危機的状况の終わりが間近に迫っているという

確信である。<sup>26</sup>

「危機」とはつまり、「歴史の運動の指標や要因ではなく」、その現象を観察する人にとっての「認識カテゴリー」のひとつである。そして観察者は「危機」を「新しい時代の変化を記述するための診断的概念」として用いるのである。<sup>27</sup> このように「危機」の言説を、危機の現象とそれを診断する観察者という依存関係の観点から捉えると、そこには古いものが脅かされているという悲観主義的な不安だけでなく、これを好機とみなし、状況を変革しようとする未来志向の語りも含まれていることが明白になる。<sup>28</sup>

以上のことから本論は、「古典的近代」の「危機」を、ポイカート以前の研究がそうであったように、共和国崩壊前夜の政治的状况を言い表す語として漠然と理解するのではなく、またポイカートのように、経済危機というひとつの実体として理解するのでもない。むしろ「危機」と診断されるような時代状況に深く入り込み、同時代人は何を決断しようとし、どのようにして未来を構想しようとしていたのかを彼らの「危機」の言説から抽出することが、この複雑な時代を理解するために不可欠だと考える。

本論の関心はとりわけこの見解に向けられている。つまり、後代の歴史学者たちのように、ナチズムの到来を招いた、ヴァイマル末期の危機的状況にのみ焦点を当てるのではなく、<sup>29</sup> ヴァイマル期全体を通じて鋭敏な観察者が捉えた「没落」の兆候と「新しいもの」の構想を、エルンスト・ユンガーという一人の同時代の「危機」の言説を再構成する作業のなかで、浮き彫りにすることに向けられているのである。

## 2. 初期エルンスト・ユンガーの歩みと「危機」

第一次世界大戦の敗戦後に誕生したヴァイマル共和国の初期を生きたドイツの人々の意識には、「ドイツ帝国崩壊のショック」「経済的ショック」「レーテ共和国の赤いショック」という3つのトラウマが植えつけられていた。<sup>30</sup> 大戦の敗北と革命の勃発によるドイツ帝国の崩壊は、それまで彼らの精神的支柱となっていた国家や文化の意識を根底から揺さぶったのであった。

国家や社会の土台を震撼させる「危機」を体験した上で、その経験をフィクションに取り込み、物語ることを通じて、過去と向き合おうとする作家は少なくない。彼らは戦争や政治的・経済的危機などの現象を一つの物語として語ることによってトラウマ的体験を整理し、自らの力で克服しようと試みる。本論で扱うエルンスト・ユンガーもまた、第一次世界大戦という「この世紀の大きな根源的破局 (Urkatastrophe)」<sup>31</sup> を前線で文字通り身をもって体験し、小説やエッセイで繰り返しその経験を文学化しようと試みた思想家・作家のひとりであった。

ユンガーはギムナジウムを卒業してすぐに志願兵として出征した。彼の親世代であれば大学と市民社会のなかで人間形成されるはずの重要な4年間を、彼は第一次世界大戦の前線で過ごした。ユンガー本人の表現を用いるなら、大戦は彼にとって、人生の「比類なき学校 (unvergleichliche Schule)」<sup>32</sup> であった。

大戦中ユンガーはソンム、ランゲマルク、ヴェルダンで起こった大戦の主要な戦闘に参加し、突撃隊の隊長になった。その功績により1918年には最年少で最高勲章「プール・ル・メリット (Pour le Mérite)」が授与されている。彼は英雄的な戦争体験を作品化し、『鋼鉄の嵐のなか

で『In Stahlgewittern』(1920)、『内的体験としての戦闘 (Der Kampf als inneres Erlebnis)』(1922)、『シュトゥルム (Sturm)』(1923)、『小さな森 125 (Das Wäldchen 125)』(1924/25)などの小説やエッセイを立て続けに発表し、作家としての名声を獲得したのであった。その後、1933年までに140本を超える政治文書を発表し、共和国の急進右派の主要な論客としても名を馳せている。政治文書とはいえ、時事的な政治問題から、文明論、自身の認識論や思想までを広範にあつかい、そして自由に考察したものであるため、政治文書のカテゴリーを逸脱した印象を受ける。こうした変幻自在の政治文書をつぶさに確認すると、それらは、同時期に書かれた主要なエッセイ『冒険心——第一稿 (Das abenteuerliche Herz. Erste Fassung)』(1929)や『労働者 (Der Arbeiter)』(1932)の主題と重なり合うことがわかる。エッセイにおいては技術や機械、群衆、大都市などの近代の諸現象が診断されているだけでなく、そこで語られる「危機」の言説のなかに、到来する時代に対する予知、そしてそれに向けた決断も同時に表明されている。それゆえ、この時代の彼の作品ほど、これまで考察してきた「危機」の意味内容を集約したものは他にないと言えるだろう。

以上が「古典的近代」の時代におけるユンガーの歩みと作品を簡潔にまとめたものであるが、彼の作品形式には本論と関係するある傾向が見られることを付記しておきたい。ユンガーが選択した作品形式には、『シュトゥルム』という小説もたしかに存在する。しかし全体として見ると、エッセイや日記そして政治文書が比重を占めている。この形式の選択が意図されたものかどうかは不明であるが、上記の作品形式が「危機」を察知し、それをすぐさま書き留めて応答するのに適していたことはたしかである。こうした効果もあいまって彼の発言は、同時代の読者の心を捉えたと推測できる。<sup>33</sup> 次章では戦後社会の「危機」の観察者としてのユンガーの性格を把握することを試みる。

### 3. 「危機」の歴史観、思考法、知覚

「市民時代の終焉の始まり (Anfang vom Ende des bürgerlichen Zeitalters)」<sup>34</sup>といわれる第一次世界大戦の以前と以後では、ドイツ社会の相貌がまったく異なっていた。内戦状況、「政治の野蛮化」、<sup>35</sup> 大衆社会の本格的到来などの現象からも市民社会の変貌は顕著に見て取れる。この激動の時代に生まれたユンガーの作品にはいずれも、古い時代と新しい時代の狭間に立たされた「危機」の意識が色濃くうつしだされている。こうした意識は、1925年の政治論文のなかで時代診断とともに表現されている。

われわれはこの戦争のなかに古い時代の没落だけでなく新しい時代の勃興もみる。われわれが敗北したのは、戦争に敗北しなければならなかったからである。つまりこの戦争は、われわれにとって終わりであっただけでなく、始まりでもあったのだ。戦争に勝利すれば、国外に勢力を拡大できたかもしれない。しかし戦争に敗北したわれわれは、未来の確たる基盤となる国内勢力の結集を図るべきである。[強調は引用者]<sup>36</sup>

「市民時代の終焉」の「危機」をめぐるこの発言を手がかりに、彼の歴史観と思考法を抽出してみよう。

ユンガーの歴史観に着目すると、彼はここでまぎれもなく黙示録的歴史観に立って発言して

いることがわかる。彼は大战を歴史的な分水嶺とみなし、「危機」の中に、歴史の終わりに到来する新しい何かを予知している。市民社会の終焉に、既存の価値観の崩壊した新しい時代が到来するという歴史観は、同時代の保守革命の思想家たちも共有していた。<sup>37</sup>

次に、時代の「危機」に向き合う彼の思考法にも目を向けてみよう。新しい何かが開始されるためには、「戦争に敗北しなければならなかった」という逆説的な見解が確認できる。彼の思考のなかでは、再生と敗北が表裏一体の関係にあるにちがいない。それゆえ彼はこの時代の「没落」を、未来に新しいものを構想するための「好機」とみなすのである。「好機としての失敗 (Scheitern als Chance)」<sup>38</sup> これこそ「危機」から獲得された彼の逆転の思考法である。

このように「危機」は、ユンガーの歴史観と思考法を決定づけていた。ところで、「危機」はどのような現象として観察されているのだろうか。特徴的なのは、近代化のもたらす諸現象のなかに危機的性格が感知されていることである。たとえば近代の大都市、技術、労働、機械、民主主義など、進歩的価値観からすれば評価されるべきもののなかに、ユンガーは過度な近代化のもたらした闇、つまり「危機」の諸相を読み取ろうと試みる。少し長い引用になるが、『冒険心』(1929)における「夜の散歩」の場面を参考にして、「危機」の言説がどのように語られているのかを捉えてみよう。

昨日、私が住んでいるベルリン東部の地区の人里離れた通りを夜な夜な散歩していると、暗闇のなかに孤独で英雄的なイメージが現れた。格子のついた地下室の窓から機械室が見える。そこでは人間による整備がされていない巨大なフライホールが軸を中心に音をたてながら回転していた。温かく油っぽい蒸気が室内から窓を通過して外へと漂っている。耳は、しっかりと制御されたエネルギーの素晴らしい作動音に魅了されていた。それはまるで豹の足の裏のようにきわめて静かに感覚を支配するかのようであり、黒猫の毛皮から聞こえ出るような微小な音と鋼鉄製の笛の音を空気中で響かせていた。これらはすべて、少しばかり眠気を誘うようでありながら、同時に感覚を大いに刺激するものでもあった。私はここで再び、航空機のエンジンの後ろで、握ったスロットルを前に押し出すと、大地から離陸しようとする力のもたらす恐ろしい轟音が立ち上がるときに体感したものの、あるいは夜の急行列車に乗り、ルール地方の巨人のような風景を突っ切ったときに体感したものを感じ取ったのである。その風景の中では、溶鉱炉の先端から出る炎が闇夜を切り裂き、荒れ狂う運動のただなかで労働していないと感じるのはまったく不可能であるように思われた。けっして満たされることのない冷たい熱狂とはこのことであり、それはきわめて近代的な感情 (ein sehr modernes Gefühl) なのだ。物質との戯れのなかには非常に危険な遊戯の刺激があることをこの感情はすでにうすうす感じている。物質が長期にわたり独自の象徴を追い求めていること、これが物質に対するわたしの願いである。というのも、物質は、牧歌、古くさい地方、居心地の良さ、ビーダーマイヤー的俗物に対するもっとも確実な破壊者であり、新しい価値観の世界に迎えられ統合されるのが遅ければ遅いほど、自らの任務を完全に果たすことになるだろう。おお、鋼鉄の体を持つ認識の蛇よ——われわれを絞め殺させないよう、魅了せねばならぬ君よ！ [強調は原文]<sup>39</sup>

マックス・ヴェーバーの歴史社会学的研究やゲオルク・ジンメルの大都市生活論がかつて、近代大都市のメカニズムを社会科学的に解明しようと試みたのに対して、ユンガーは、近代の諸

要素が集約された大都市を理論的に分析するのではなく、もっぱら自分の目で観察し、そこから受け取る様々な印象を美的・感性的に捉え、それを文学作品における美的表現に彫琢しようと試みる。たしかに、ユンガーは他の場面において、「大都市の多種多様な経験の終わりなき連鎖によって不安が高まる」<sup>40</sup> ことも告白しており、大都市には過度な近代化によって引き起こされるある種の危険が孕まれていることも理解している。その意味において、彼の記述には反近代的スタンスも多少保持されていることがわかる。しかしながら引用箇所では、そうした文化批判の態度を決め込むよりもむしろ、社会の工業化や産業化をもたらす冷たくも激しい運動が、観察者に抗い難い魅惑を伴いながら「近代的な感情」を呼び起こすという点に焦点が当てられている。かくいう「冷たい熱狂」とは、3年後に発表される『労働者』の世界像を先取りしたものであり、人間の制御を離れ自立した機械の姿に新たな技術的近代の幕開けを感知した表明でもある。さらに、引用箇所後半における近代化の加速の先に新しい何かを読み取ろうとする態度からも、観察者の心情を占めるのは「不安」ではなく、「破壊」を歓迎する英雄的な感情であることが確認できる。

以下では、こうした過度な近代化の美的表現から導き出される未来の秩序構想を、共和国崩壊前夜のエッセイ『労働者』で確認することにする。

#### 4. 歴史の終わり——「労働者の形態」

1930年の論文「総動員（Die totale Mobilmachung）」が発表された時点ではまだ、市民社会から全体主義の社会への変容は、国家主義的思考の枠組みで予感されるに留まっていた。しかしながら2年後に発表された『労働者』では、国家主義的思考の枠組みが取り去られ、「全地球的（planetarisch）」思考で今後到来する社会秩序が構想されている。<sup>41</sup> 奇しくもナチスの権力掌握前夜に刊行されたことで、ナチズムの世界観との類似から数多くの論争を巻き起こしたこのテキストは、作者ユンガー独自の歴史哲学に基づき社会秩序の変化を以下のように予見している。

19世紀型の市民社会が崩壊した後、社会秩序モデルは「作業場風景（Werkstättenlandschaft）」から「計画風景（Planlandschaft）」へと移行する。その後、単一の階層秩序のもとで同類型の「労働者（Arbeiter）」のみを構成員とする「労働国家（Arbeitsstaat）」へと転回する。この「労働国家」に達してはじめて、「全地球的・帝國的規模（planetarisch-imperialen Ausmaßen）」<sup>42</sup>の政治的空間支配が貫徹するはずである、と。<sup>43</sup> 「労働国家」の誕生には「労働者」の技術を大規模に動員することが不可欠とされ、そのことは次の一文で簡潔に表明されている。「技術とは、労働者の形態（Gestalt des Arbeiters）が世界を動員する手段である」。<sup>44</sup>

ユンガーのイメージを読み込むと、ここで提示された「労働者」とは、プロレタリアートという特定の社会的・経済的階級の人間のことではないことがわかる。それはむしろ、社会的次元を超えた形而上的存在のことであり、市民社会の「危機」から誕生した新しい人間の象徴として捉えられている。また、別の箇所でもやはり「労働者の形態」とは、社会的次元では捉えられない「部分の総和を超える全体」<sup>45</sup>であり、多様な現象に統一的な意味を与える「形而上的権力」<sup>46</sup>であるとも述べられている。こうした一連の発言から明白なのは、ユンガーは同時代のゲシュタルト心理学で用いられた全体論的概念である「形態」を借用して、「労働者」を社会的次元においてあらゆる差異を超えたところに浮かび上がる象徴的・統一的人間像として

把握していることである。それゆえ「形態」とは、「あらゆる現象の多様性の背後に刻印されている動的な統一、あるいは動的な全体性 (dynamische Totalität)」<sup>47</sup>を意味するのである。

次に、『労働者』における世界像の変容に目を向けると、第1部から第2部にかけて、「労働者の形態」が技術の流動化作用によって「総労働性格」<sup>48</sup>の表現としてあらゆる領域に浸透される様子が描き出されている。過渡期として提示された「作業場風景」では、ある一つの原理が諸領域で支配的となる。それは「労働 (Arbeit)」である。

労働は拳、思考、心臓のテンポであり、昼夜の生、学問、愛、芸術、信仰、礼拝、戦争である。労働は原子の振動であり、星辰と太陽系を運動させる力である。<sup>49</sup>

ここでユンガーが表明しているのは、市民社会から「労働国家」に向かう過渡期の社会ではなく、「労働」原理が生のあるあらゆる局面に浸透しているという事態である。「労働」は身体の運動や精神の活動だけでなく、宗教や戦争などの人間のありとあらゆる活動領域に作用を及ぼす。余暇は、「労働」の対義語ではなくむしろ同義語になる。人間もまた、個人としてではなく、「労働的性格」を体現する一つの「類型 (Typus)」としてのみ姿をあらわす。「観相学的視線」で過渡期の「危機」の諸相を捉えるユンガーは、大都市の機械的なリズムやテンポが生活形態の一様化を迫るだけでなく、人々が日々の生活のなかで、こうしたリズムやテンポに合わせて相貌や容姿を冷たい類型的なものへと変貌させていることも指摘している。この変貌過程において、多様性や個性が重視されていた市民的見の外見の特徴は完全に消え去る。人間の身体は、日々の技術的・機械的な刺激から身を守るため、「表面に電気メッキを施したように、いっそう金属的となる」<sup>50</sup>のである。

「総労働性格」が刻み込まれた世界では、労働の実質的な内容や労働の倫理などはもはや問題とはならない。「労働空間」では、むしろその実質なき形式を生きることだけが重要とされ、個々の労働過程はオートメーションの状態へと、つまり「技術の完成 (Perfektion der Technik)」<sup>51</sup>の状態へと近づくのである。『労働者』第2部で顕著にみられるように、第1部で「巨大な工場」として描かれた「動的」空間秩序はしだいに影を潜め、「静的」空間秩序が前景化されるようになる。その変化に伴って、「電気」「接続」「電磁場」などのイメージが多用される。このようにしてユンガーの描く「労働空間」は最終的に、あらゆる問題が技術決定論的に解決される自動的な空間秩序として提示されるのである。<sup>52</sup>

このように『労働者』の構想の根本的性格を抽出してみると、自動的な空間秩序を提示しようと試みるユンガーの思考回路には、「危機」の思考法が内在していることがわかる。近代技術社会が機能化・断片化の過程を歩みだしたことによって様々な弊害をもたらしたことは、ポイカートの「古典的近代」の病理論ですでに指摘されていた。しかしながらユンガーはこうした「危機」を逆に「好機」と捉え返し、社会の技術化を限界まで加速させることによって、時代を先取りした電子通信網的な空間秩序を導き出した。つまり、ポイカートの議論で見落とされてきた「危機」概念の「ユートピアの精神」を現出させること、これが『労働者』に秘められたプログラムであった。

## おわりに

「危機」の観察者ユンガーは、第一次世界大戦後に変貌した世界を鋭敏に捉え、確たる思考法と歴史観にもとづき新たな世界像を美的表現で描き出した。旧来の市民社会の「危機」から新たな秩序としての「技術の完成」の状態を導き出したユンガーの『労働者』には、現代社会批判にも通じる、近代技術社会に対する鋭い洞察が含まれていた。そして、彼の「危機」を捉える知覚の鋭さそのものが「古典的近代」における近代技術の観察から得られたという点は強調されるべきであろう。また、本論で明らかにしたように、共和国の「危機」に対するユンガーの応答は、いわゆる「全般的危機」<sup>53</sup>と呼ばれるヴァイマル末期（1930-33）に突如あらわれたわけでもなかった。<sup>54</sup> その応答は、ポイカートの強調した経済危機よりも早い段階から、近代の「工業社会的な近代性の危機的性格」を克服し、新しい何かを発見するための診断、決断、予知として提示されていたのであった。

「古典的近代」における「危機」の言説をさらに深く理解するには、ユンガーとは政治的に対極の立場にいた同時代の急進左派の劇作家ベルトルト・ブレヒトを取り上げて、比較考察することが有効であると思われるが、それは今後の課題としたい。

## 註

- 1 Detlev J. K. Peukert: Die Weimarer Republik. Krisenjahre der klassischen Moderne. Frankfurt a. M. 1987. [デートレフ・ポイカート（小野清美・田村栄子・原田一美訳）『ワイマル共和国——古典的近代の危機』、名古屋大学出版会、1993年。] 訳出に際しては邦訳も参照した。また、原音にしたがって、邦訳を本文中に表記する際は、『ヴァイマル共和国』とする。
- 2 Vgl. ebd., S. 11. [同書、5頁を参照。] 「古典的近代」の概念は、すでに美術史で用いられていた概念であり、ポイカートは、社会的文化的位相で近代の問題性を説明するため、この概念を導入した。また、1930年代でひとつのワンサイクルが閉じると設定したポイカートの議論に対して、1933年の危機で終わりを迎えるのは、近代化の貫徹を伝える特定の社会のことに過ぎず、33年以降もまだ近代が続くことを指摘するのは、Anthony McElligott: Introduction. In: Ders. (Hg.): Weimar Germany. New York 2009, S. 1-25, hier S. 23.
- 3 Peukert, a. a. o., S. 11. [ポイカート、前掲書、5頁。]
- 4 Ebd., S. 266. [同書、233頁。]
- 5 Vgl. ebd., S. 266-271. [同書、233-237頁を参照。] 本書の理解として訳者の秀逸な解説も参照した。小野清美「ポイカートと近代」、同書、261-273頁。
- 6 山井敏章『「計画」の20世紀——ナチズム・＜モデルネ＞・国土計画』、岩波書店、2017年、2頁。
- 7 Peukert, a. a. O., S. 11. [ポイカート、前掲書、4頁。]
- 8 Vgl. ebd., S. 9-11. [同書、3-4頁。]
- 9 Vgl. ebd., S. 271. [同書、237頁。]
- 10 田村栄子「序論：ヴァイマル共和国研究史——「ナチズムと近代の相克」の視点から」、田村栄子・星野治彦編『ヴァイマル共和国の光芒——ナチズムと近代の相克』、昭和堂、2007年、1-40頁所収、3頁。
- 11 Vgl. Peter Fritzsche: Nazi Modern. In: Modernism/Modernity. 3. 1 (1996), S. 1-22, hier S. 10.
- 12 Vgl. Reinhart Koselleck: Krise. In: Otto Brunner/Werner Conze/Reinhart Koselleck (Hg.): Geschichtliche Grundbegriffe. Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland in 8 Bänden. Studienausgabe, Bd. 3. Stuttgart 1982, S. 617-650, hier S. 617; Günther Schnurr: Krise. In: Gerhard Klause/Gerhard Müller (Hg.): Theologische Realenzyklopädie. Bd. 20. Berlin 1990, S. 61-65.

- 13 Vgl. Reinhart Koselleck: Begriffsgeschichten. Studien zur Semantik und Pragmatik der politischen und sozialen Sprache. Mit zwei Beiträgen von Ulrike Spree und Willibald Steinmetz sowie einem Nachwort zu Einleitungsfragmenten Reinhart Kosellecks von Carsten Dutt. Frankfurt a. M. 2006, S. 207-213.
- 14 Vgl. ebd., S. 207.
- 15 Vgl. Moritz Föllmer/Rüdiger Graf/Per Leo: Einleitung. Die Kultur der Krise in der Weimarer Republik. In: Moritz Föllmer/Rüdiger Graf (Hg.): Die "Krise" der Weimarer Republik. Zur Kritik eines Deutungsmuster. Frankfurt a. M./New York 2005, S. 9-41, hier S. 10.
- 16 Rüdiger Graf: Either-Or. The Narrative of "Crisis" in Weimar Germany and in Historiography. In: Central European History. 43. 4 (2010), S. 592-615, hier S. 614.
- 17 Vgl. Reinhart Koselleck: Erfahrungsraum und Erwartungshorizont. Zwei historische Kategorien. In: Ders.: Vergangene Zukunft. Zur Semantik geschichtlicher Zeiten. Frankfurt a. M. 2000, S. 349-375.
- 18 Vgl. Föllmer/Graf/Leo, a. a. O., S. 23ff.
- 19 Vgl. ebd., S. 23f.
- 20 Vgl. Rüdiger Graf: Die "Krise" im intellektuellen Zukunftsdiskurs der Weimarer Republik. In: Moritz Föllmer/Rüdiger Graf (Hg.), a. a. O., S. 77-106., hier S. 92-99.
- 21 Vgl. ebd., S. 77-106.
- 22 Vgl. Benjamin Ziemann: Die Zukunft der Republik? Das Reichsbanner Schwarz-Rot-Gold 1924-1933. Bonn 2011, S. 7-71. hier S. 10f.
- 23 Michael Makropoulos: Haltlose Souveränität. In: Manfred Gangl/Gérard Raullet (Hg.): Intellektuellendiskurse in der Weimarer Republik. Zur politischen Kultur einer Gemengelage. Darmstadt 1994, S. 197-211, hier S. 202.
- 24 Ebd.
- 25 Vgl. Graf, a. a. O., S. 82ff. ヴァイマル期における知識人の黙示録の思想に共通してみられる特徴については、Vgl. Klaus Vondung: Die Apokalypse in Deutschland. München 1988, S. 245; Ulrich Linse: Barfüßige Propheten. Erlöser der zwanziger Jahre. Berlin 1983, S. 28.
- 26 ラインハルト・コゼレック (村上隆夫訳) 『批判と危機——市民社会的世界の病因論のための一研究』、未來社、1989年、142頁。
- 27 Vgl. Gennaro Imbriano: "Krise" und "Pathogenese" in Reinhart Kosellecks Diagnose über die moderne Welt. In: Forum Interdisziplinäre Begriffsgeschichte. 2. 1 (2013), S. 38-48, hier S. 46
- 28 この態度に着目して、ヴァイマル期の政治文化を、左右両翼の過激派を視野に入れながら横断的に論じたものとして以下の文献は示唆に富む。Vgl. Rüdiger Graf: Die Zukunft der Weimarer Republik. Krisen und Zukunftsaneignungen in Deutschland 1918-1933. München 2008.
- 29 たとえば、Vgl. Hans Mommsen: Die verspielte Freiheit. Der Weg der Republik von Weimar in den Untergang 1918-1933. Berlin 1989, S. 361ff; Heinrich-August Winkler: Weimar 1918-1933. Die Geschichte der ersten deutschen Demokratie. München 1933, S. 557-594.
- 30 Vgl. Michael G. Festl: Scheitern an Kontingenz. Politisches Denken in der Weimarer Republik. Frankfurt a. M. 2019, S. 12.
- 31 George F. Kennan: Bismarcks europäisches System in der Auflösung. Die französisch-russische Annäherung 1875-1890. Frankfurt a. M./Berlin/Wien 1981, S. 12.
- 32 Ernst Jünger: Das abenteuerliche Herz. Erste Fassung. Aufzeichnungen bei Tag und Nacht. In: Ders.: Sämtliche Werke in 22 Bänden. Bd. 9. Stuttgart 1978-1983 bzw. 2003, S. 98.
- 33 ユンガーは、ユダヤ系リベラル派の週刊誌『日誌 (Tagebuch)』(1929)の編集者から「「青年ナショナリズム」の誰もが認める精神的指導者」と呼ばれていた。このことから、ヴァイマル末期では敵対者も認める重要な論客になっていたことが伺える。エルンスト・ユンガー (川合全弘訳) 「「ナショナリズム」とナショナリズム」、『ユンガー政治評論選』、月曜社、2016年、247-262頁、引用箇所は247頁。
- 34 Vgl. Wolfgang J. Mommsen: Der Erste Weltkrieg. Anfang vom Ende des bürgerlichen Zeitalters. 2. Aufl. Frankfurt a. M.

2004.

- 35 ジョージ・L・モッセ（宮武実知子訳）『英霊——創られた世界大戦の記憶』、柏書房、2002年、第八章を参照。
- 36 Ernst Jünger: Der Frontsoldat und die wilhelminische Zeit. “Die Standarte” vom 20. September 1925. In: Politische Publizistik 1919-1933. Hg. v. Sven Olaf Berggötz. Stuttgart 2001, S. 78-85, hier S. 85.
- 37 保守革命の黙示録の思想については、拙論「保守革命と黙示録——「没落」の不安と「ライヒ」の勃興」、『社会システム論』第23号、2020年、1-21頁を参照されたい。
- 38 Steffen Martus: Scheitern als Chance. Ernst Jüngers Kunst der Niederlage. In: Lutz Hagedstedt (Hg.): Ernst Jünger. Politik-Mythos-Kunst. Berlin 2004, S. 253-270. ドイツの敗北を国内の左派の裏切りのせいにした右派の「七首伝説」を代表とする、「敗北の文化」は戦後ドイツのトポスのひとつであった。ヴォルフガング・シヴェルブッシュ（福本義憲・高本教之・白木和美訳）『敗北の文化——敗戦トラウマ・回復・再生』、法政大学出版局、2001年、219頁以下を参照。ちなみにユンガーは1927年には「七首伝説」を広めたナチ党を批判し、その言説から距離をとるようになっていた。Vgl. Ernst Jünger: Nationalismus und Nationalsozialismus. “Arminius” vom 27. März 1927. In: Ders.: a. a. O., S. 317-320, hier S. 318. ユンガーのこの逆転の思考法に関連して、「災害ユートピア」の言説にも、「危機」を未知の関係性を作り出すチャンスとして理解する同様の思考法が働いている。レベッカ・ソルニット（高月園子訳）『災害ユートピア——なぜそのとき特別な共同体が立ち上るのか』、亜紀書房、2010年、427頁を参照。
- 39 Jünger: Das abenteuerliche Herz. Erste Fassung. Aufzeichnungen bei Tag und Nacht. In: Ders.: a. a. O., S. 154.
- 40 Ebd., S. 147.
- 41 『労働者』の「全地球的」思考の展開については、拙論「労働空間」と「広域」——30年代エルンスト・ユンガーとカール・シュミットの技術論と秩序構想」、『ドイツ文学』154号、2017年、195-212頁を参照されたい。
- 42 Ernst Jünger: Der Arbeiter. Herrschaft und Gestalt. Hamburg 1932, S. 202. 訳するにあたって以下の邦訳も参照した。エルンスト・ユンガー（川合全弘訳）『労働者——支配と形態』、月曜社、2013年。
- 43 「計画風景」「労働者」「動員」など、ユンガーの使用した概念は、右派だけでなく左派の政治的概念とも似通っていた。そのため、『労働者』は当時の読者を困惑させるものであった。読者はこのテキストを「第三帝國的」だけでなく、「ソヴィエト的」な全体主義国家の構想としても解釈していた。たとえば、ユンガーの回想によると、保守革命の思想家シュペングラーは、このテキストを「プロレタリアートの称賛」だと誤解していた。Vgl. Ernst Jünger. Die kommenden Titanen. Gespräche. Hg. v. Antonio Gnoli/Franco Volpi. Deutsch v. Peter Weiß. Wien/Leipzig 1995, S. 112. また、『労働者』で描かれるテクノクラシー的社会モデルに、右派の「ボルシェヴィズム的」世界像を解釈した論者は刊行当初から一定数存在していた。たとえば保守革命の思想家でナショナル・ボルシェヴィストのエルンスト・ニーキッシュは『労働者』が「ロシア革命なしには存在することができなかったであろう」と断言している。Ernst Niekisch: Erinnerungen eines deutschen Revolutionärs. In: Ders.: Gewagtes Leben 1889-1945. Bd. 1. Köln 1974, S. 188. さらに、ハイデガーは、このテキストにおける形而上学と全体主義との密接な結びつきを念頭に、『労働者』を次のように解釈していた。「ユンガーの『労働者』は、ニーチェの形而上学を基礎として正しく理解された形而上学である。つまり、ありとあらゆる「市民的」イメージによって洗練された、帝国主義的「コミュニズム」の形而上学なのだ」。Martin Heidegger: Zu Ernst Jünger. In: Ders.: Gesamtausgabe. Hg. v. Peter Trawny. Bd. 90. Frankfurt a. M. 2004, S. 40.
- 44 Jünger, a. a. O., S. 150.
- 45 Ebd., S. 31.
- 46 Ebd., S. 113.
- 47 Gilbert Merlio: Jünger und Spengler. In: Peter Koslowski (Hg.): Die großen Jagden des Mythos. Ernst Jünger in Frankreich. München 1996, S. 41-60, hier S. 50.
- 48 Jünger, a. a. O., S. 99.
- 49 Ebd., S. 65.
- 50 Ebd., S. 107.
- 51 Ebd., S. 170.
- 52 こうしたユンガーの想像力に焦点を当て、H・レーテンは、電子回路モデルで社会システムを解釈しようと試み

た最初のテキストとして『労働者』を位置づけている。Vgl. Helmut Lethen: Die elektrische Flosse Leviathans. Ernst Jüngers Elektrizität. In: Wolfgang Emmerich /Carl Wege (Hg.): Der Technikdiskurs in der Hitler-Stalin-Ära. Stuttgart/Weimar 1995, S. 21-27.

53 Peukert, a. a. O., S. 243-265. [ポイカート、前掲書、209-230 頁。]

54 もっとも、世界恐慌に対するユンガーの「危機」の言説が、黙示録的なヴィジョンに彩られていることは弟フリードリッヒ・ゲオルク・ユンガーに宛てた手紙の言葉からわかる。「つまり時代があまりにも大胆すぎたので、わたしのような古い戦士は、好機の兆しや愉快的な刺激を感じ取らずにはいられませんでした。ヨーロッパの陶磁器店のことを考えたり、数学的な精確さで近づいてくる大旋風の中心のことを考えたりするとき、私の気持ちは、数ヶ月前から完全に高揚し、黙示録的なシャーデンフロイデに変わってしまったのです」。Zit. nach Sven Olaf Berggötz: Nachwort: Ernst Jünger und Politik. In: Ders. (Hg.): Ernst Jünger: a. a. O., S. 834-878, hier S. 841. このように、ユンガーの私的な手紙のなかにも、黙示録的歴史観と「好機としての失敗」という思考法を読み取ることができる。